1200年から1260年頃までの
トルバドゥールの哀悼歌（planh）の翻訳

高　名　康　文

はじめに

以下は、トルバドゥールによる哀悼歌（ブラーニュ）（オック語　planh）のうち、1200年から1260年頃に書かれたとされているものの翻訳である。これは、すでに発表した以下の仕事の続きをなすものである。

（1）高名康文「トルバドゥールによる12世紀の哀悼歌（planh）の翻訳」『福岡大学研究部論集　A：人文科学編』9巻3号（2009）、pp.11–21.
http://www.adm.fukuoka-u.ac.jp/fu844/home2/Ronso/RonsyuA/Vol9-3/A0903_0011.pdf
（2）高名康文「アイメリック・デ・ペギヤンの哀悼歌」『福岡大学人文論叢』42巻3号（2010）、pp.843–857.
http://www.adm.fukuoka-u.ac.jp/fu844/home2/Ronso/Jinbun/L42-3/L4203_0843.pdf
（3）高名康文「ソルデル、ベルトラン・ダラマノン、ペイレ・ブレモン・リカス・ノヴァスによるブラカッツ殿に捧げる哀悼歌（planh）三篇（翻訳）」、成城大学大学院文学研究科ヨーロッパ文化専攻紀要『ヨーロッパ文化研究』31集（2012）、pp.135–149.
http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/journal/europe/pdf/seur-31-05.pdf

哀悼歌についての簡単な解説は、それぞれの翻訳の冒頭に記しているので、ここでは繰り返さない。

（1）で12世紀の哀悼歌を翻訳した後、ただちに13世紀のものの翻訳

にかかる予定であったが、国内の図書館に所蔵されていない文献が多く、長らく頓挫していた。(2) と (3) は、その間に断片的に発表していた13世紀の哀悼歌で、それぞれ、今回の翻訳のギラウト・デ・カランソンとダウデ・デ・プラダスの作品の間、ポンス・デ・カプドーリュとアイメリック・デ・ベレノイの作品の間に入れるべきものである。

今回、平成24-25年度成城大学特別研究助成を獲得したことにより、(1) で目的としていたE. シュルツェ・ブザッカが論考の中でまとめているリスト[1] に挙げられている29の哀悼歌のすべての翻訳を完了できた。ただし、研究を進める中で、これよりも時代の下るものと年代不詳の作品があと10篇あまりあることが確認できた。これについては今後の課題としたい。

これまでの仕事と同様に、底本はM. デ・リケールによる選集[2] を中心に選定し、これに収められていないものについては、できるだけ新しく定評のあるものを使用するようにした。訳出にあたっては、(2) 以降の仕事と同様に、行分け詩の形式をとった。(2) では、できる限り各詩行の内容が原典と対応するようにという配慮をしたが、(3) 以降はそれよりも読みやすさに配慮している。訳文中の〔…〕は原文にはない語句を補っている箇所であることを示し、〔=…〕は直前の語句を言い換えにより説明している箇所であることを示すものとする。

ギエム・アウジエ・ノヴェラ（Guillem Augier Novella）[3]
Quascus plor e planh son dampnatge（PC205, 2）[4]

底本：ed. M. de Riquer, *Los trovadores*, t. 2, pp.1178–1180.
死者：ベジエ副伯レーモン＝ロジェ・トランカヴェル[5]（1209年没）[6]
詩型：a8, b8', a8, b8', c8, c8, d8, d8, e8, e8（coblas unissonans[7] , Frank 390: 9）[8]

Ⅰ　皆が泣いて嘆いています。損害と
不幸と悲しみを。
私は、ああ、心に
とても大きなおののきと悲しみを持ち
生きている間は、尊敬された勇者〔の死〕を

嘆いて泣くことを終えることがないでしょう。
殺されてしまったベジエの勲高い副伯のことです。
勇敢で、雅やかで、
快活で、最も正しく、金髪の
世界で最良の騎士でした。

Ⅱ　あの方は殺されてしまいました。このように酷い行いが
かつて見られたことはありませんし、このような大きな誤りも、
これほどに神から離れてしまうような行為が
我らの主に対して行われたことはありません。
あの邪なピラトの家系に属する
背教者の犬どもが行ったようなことは。
やつらはあの方を殺したのです。神も
私たちを救うために死を受け入れたのですが、
それは、身内を救うために
同じような橋を渡ったかの方に似ています。あの方を救い給え。

Ⅲ　大家に属する千の騎士と
高貴な千の奥方が
あの方の死ゆえにさ迷うことでしょう。
もしもあの方が生きておれば
十分に年金を与えられて、有力になって敬われていたであろう
千の自由民と千の召使いも同様です。
もはやあの方は亡い。ああ神よ、なんという痛手か。
あなた方がどうなったか、何があなた方に起こったかに注意をしなさい。
あの方を殺した者どもが、誰でどこから来たかということにも。
もうあの方はあなた方にもてなしを与えることも、返答することもない
　のですから。

Ⅳ　殿ばらよ、身分の高い者にとっても低い者にとっても
とても激しい痛みなのに違いありません。
あの方の尊敬された領主ぶりを
思い出す時には。私たちに対する

もてなしや、私たちを守って
死を宣せられた時に見せた誠実のことを。
もはやあの方は亡い。ああ神よ、なんという痛手か。
惨めな私たち、なんと皆、酷い目に遭っていることだろうか。
どちらに向かえばよいのか、どこで
停泊すればよいのか[9]。私の心は、ことごとく砕けてしまいます。

Ⅴ　卓越した騎士、家柄において卓越し、
誇りにおいて卓越し、勲しにおいて卓越し、
分別において卓越し、雄々しさにおいて卓越し、
贈与することにおいて卓越し、人に仕えてもよく、
誇りにおいて卓越し、謙虚さにおいて卓越し、
分別において卓越し、乱痴気騒ぎにおいて卓越し、
美しく善良で、あらゆる美徳において申し分のない方でした。
かつて存在した人であなたに並ぶ者はいませんでした。
あらゆる喜びの源となる
泉を、私たちはあなたにおいて失ったのです。

Ⅵ　神性においてみずからを
三位一体となすかの神に祈ります。
最良の喜びの存在する天に
あの方の魂を置いてください、苦しめないでくださいと。
また、人々が祈りを捧げるすべての〔聖〕人に、
あの方の美徳を救い、お助けくださいと祈ります。

Ⅶ　鸚鵡（おうむ）の君[10]よ、愛はかつて私を
喜ばせてはくれませんでした。
海が周りを囲む土地において
かつて生まれた中で最良の殿ゆえに
被った損害が私を悲しませている程には。
どこの馬の骨ともわからない裏切り者たちが、あの方を殺したのです。

ギラウト・デ・カランソン（Guiraut de Calanson）[11]
Belh Senher Dieus, quo pot esser sufritz（PC243, 6）

底本：ed. M. de Riquer, *Los trovadores*, t. 2, pp. 1085–1087.
死者：カスティーリア王アルフォンソ８世の息子フェルナンド（1211年没）
詩型：a10, b10, b10, a10, c10, c10, d10', e10, d10', e10（coblas unissonans, Frank 605: 1）

Ⅰ　善き主である神よ、どうすれば、耐え忍ぶことができるのでしょうか？
勲高いカスティーリャ王の息子である
あの若者の死のような、恐ろしい悲しみを。
あの方のところから帰る者が、不満を持っていたり、
忠告をもらえなかったり、途方に暮れたままということはありませんでした。
アーサー王につい言われたり語られたりしているような
すべての美徳があの方において復元されていたのです。
必要な忠告のすべてが見出されていました。
今や、導き手となる定めにあった方、
世界のすべての善良な若者の中で最良の方は亡くなってしまったのです。

Ⅱ　王の息子といえど、これほどに豊かな場所にたどり着いた[12]のを
見聞きしたことはありません。
あの方の死のせいで悲しむ多くの人たちが、ずっと嘆いています。
あの方に寄せる悲しみは、始めよりも、
〔他の人に対してであれば〕終わりになるであろう時の方が大きくなります。
というのも、あの方のいた場所の豊かさといえば、
そこにいて、四季を通して幸せでないというほどに
ひねくれた者は、母親から生まれた者の中には決していなかった程です。
悩み事がないような宮廷があるというのは、

私が思うに、天国であると言えます。

Ⅲ　フェラン[13] は、主君となって導き手となるはずでした。
彼がこの世を愛することを神が喜んでおれば。
美しく、善良で、あらゆる行いにおいて礼儀に適っており、
気前がよく、高貴で勲高く感じのよい方でした。
若王、勲高いリシャール殿、
ジョフロワ伯の勇敢な三兄弟[14] のすべては、
あの方が加わることで完全になると思われていたのです。
あの方は、体格も姿も三人に似ていて、
富と、あらゆる善の父親だったのです。
その勇ましさと天恵が、今となっては悲しみのもとになっています。

Ⅳ　巨人たち[15] が溺れ死んで以来、
ヨルダン川から西洋に至るまで、この世に生まれ育てられた若い王が
このような悲しみのもととなったためしはありません。
フランスとイングランドの両国の人々は皆、
嘆き、大きな悲鳴をあげています。
アレマン［＝ドイツ］人も、有力な彼の親族のすべて、
この世の領主たち、勲高い皇帝、
ザクセンもスペインもアラゴンもです。
代々続いたキリスト教徒の家で、
あの方の臣下でも親族でもない家はないのですから。

Ⅴ　さらにあの方は、すべての者の中から選ばれていたのでした。
後一年長生きすれば、だったのですが、一番よい場所で
心と意思から喜んで神にお仕えするようにと。
素晴らしい天恵の泉であり、アラブ人に対する壁であり、
三月の太陽であり、蘇りの四月であり、
世界の鏡であったあの方において、「値打ち」はあったのでした。
これ以上何を言うことがありましょうか。誰も語れないのですから、
悲嘆に暮れるこの世があの方から被った
痛みのことを。真実の赦し主である神よ、

あの方に赦しを。あの方は私たちにし返しをしたのですから[16]。

Ⅵ　ああ、なんという悲しみでしょう。あの方は鏡だったのですから、
皆にとって、勲高い者にとっても、身分の高い者にとっても。

ダウデ・デ・プラダス（Daude de Pradas）[17]
Ben deu esser Solatz marritz（PC124, 4）

底本：ed. P. Gresti, *Il trovatore Uc Brunenc. Edizione critica con commento, glossario e rimario*, Tübingen: Niemeyer, 2001, pp.123–129.
死者：ユック・ブリュネンク（トルバドゥール）（1220–30 年頃没）[18]
詩型：a8, b8', b8', a8, c6', c6', d8, d8（coblas unissonans, Frank 577: 245）

Ⅰ　「楽しみ」は気を塞ぎ、
「愛」も悲しみ、気を塞いでいるに違いありません。
人々は、自分の人生と
そこにあると言われているよいことをあまりありがたがらないに違いありません。
会話と礼節と
歌と気晴らし、喜びと慈悲に
意味があるのは、この人のおかげだったというような人物が
彼らのもとからいなくなったのですから。そのせいで悲しみは大きいのです。

Ⅱ　もう決してよい詩句が聞かれることはないでしょう、
均整をとって作り込まれた歌も。
「愛」よ、お前が雅な心を持っていると言って
お前のことを広めてくれた人は亡くなりました。
あの方は真実を語っていた。
お前にはこのような人物が必要だったのです。
あの方が、お前が喜ぶようなことを言おうとすれば、
どんな歌い手もかたなしでした。

Ⅲ　かつて人があれほど心地よい言葉を口にしたことも、
あれほどに洗練された弁舌を持ったこともありません。
あの方の声はたいへん美しかったので、
あの方の甘い歌を聞けば
サヨナキドリも驚いていました。
間違いなく立派な方でした、
私がかつて知ったどのような男よりも。
だから、神はあの方を自分のもとにお召しになったのです。

Ⅳ　イエス・キリストに祈ります。あの方の導き手になってください、
自分の友たちにだけあてがわれた
右の席にあの方をつかせてください、と。
そうすれば、その場所はよく埋められることでしょう。
聖なるマリアさま、
あなたに助言を致したいのですが、
もし、あなたが、礼節にかなった人を喜びとするのであれば、
ユーゴ・ブリュネンク殿のことを放っておかないでください。

Ⅴ　卑しい心に導かれる者は皆
あまりに惨めで鈍重です。
この世に迷い、本分を忘れているのですから。
この世から旅立てば
神は、そのような人をそばにおきたいとは思わず
地獄送りにします。
罰をいっぱい受けながらそこに留まるのです。
彼らを思ってくれる人は決していないでしょう。

Ⅵ[19]　まっすぐサラス[20]に道をとってください。
なぜなら、ロデーズ〔の人たち〕が悼むべき人は
歌や詩（ヴェルス）や風刺詩を
そこに送ることを慣わしとしていたからです。

Ⅶ　「美しい欲求」[21]が、私がどこにいようと、

私の内面を支配して、
その喜びとなることをしたり言わせたりするのです。
私はまだ会ったことがないのですが、私の心の中にいるのです。

ポンス・デ・カプドーリュ（Pons de Capdueil）[22]
De toz chaitius sui eu aicel qe plus（PC375, 7）

底 本：ed. H. H. Lucas, «Pons de Capduoill and Azalais de Mercuor: A Study of the Planh», *Notthingham Medieval Studies*, 2（1958）, pp.121–123.
死者：アザライス[23]（13 世紀前半没）
詩型：a10, b10, b10, a10, c10, c10, d10, e10', e10'（coblas unissonans, Frank 607: 1）

Ⅰ　最大の苦しみを持ち、おおいに苦悩を味わっている
私は、すっかり惨めな思いでいます。
そのため、死にたいものだと思っていますし、自殺をすることは
私の喜びになるでしょう。なぜなら、あまりの心迷いで、
生きることは、私にとって、悲しみ、苦しみだからです。
それは、意中の夫人であるアザライス様が亡くなったからです。
心重く思いを巡らせば、腹ただしく、悲しく、残念です。
裏切り者の「死」よ、詩の形にして、お前に言ってやろう、
この世で、あれよりもよいものを殺すことはできない、と。

Ⅱ　ああ、どれだけ癒され、救われることでしょうか？
神が、まず私が死ぬことを、よしとしたとすれば。
ああ惨めな私、あの方が亡くなった後、
これ以上生きたいとは思いません。王イエスよ、あの方の罪を赦したまえ。
強く、正しい、真実の神よ、
救い主のキリストよ、何よりもまず「喜び」と呼ばれる方よ、
あの方の魂を聖ペテロと聖ヨハネに預けてください。
人が口にできるあらゆるよいことは、あの方のうちにあり、

あの方は、あらゆる悪から免れているのですから。

Ⅲ　殿よ[24]、私たちが皆、あの方の死を嘆くのは当然のことです。
これほどにも優雅な人柄が、女性のうちに見られたことはないのですから。
今後は、あれほど素晴らしい物腰の人が出てくるでしょうか？
美にも、称賛の対象となる長所にも何の意味があるでしょう？
分別にも、名誉にも、陽気な集いにも何の意味があるでしょう？
親切な歓待にも、礼節に適った行いにも。
また、真摯なもの言いや、称賛される行いには何の意味があるのでしょう？
嘆きに満ちた世界よ、悪気はないのですが、私はお前を憎みます。
お前にはあまり価値がない、最良のものが欠けてしまったのだから。

Ⅳ　「喜び」は破壊され、「若さ」は失われました。
この世はすべて無に帰してしまいました。
伯も公も、多くの権勢を誇る領主も、
誰もあの方を目にしたことがないのに、そのお陰で余分に立派だったのですし、
千の奥方も、あの方によって、値打ちを増していたのでした。
いまや、神が私たちにお怒りなのがわかります。
あの方にあれだけ値打ちをもたせておいて、
ああして、私たちから気晴らしと笑いを奪い、
それ以上の悲しみと物思いを与えようというのですから。

Ⅴ　いまや私たちは知ることができます。天使たちが天で
あの方の死ゆえに、元気で陽気でいると。
というのは、次のように言われているのを耳にしますし、読誦している人がいるからです。
「人びとがよいと思う人を神もよいと思う。」[25]
ですから、あの方は豪勢な宮殿で
ユリの花、薔薇、グラジオラスに囲まれていることがよくわかります。
天使たちが喜びのうちに歌いながらあの方を賞賛しているのです。

決して嘘をついたことのないあの人〔＝神〕は、
あの方に、他のどの女性よりも先に天国の座を与えるに違いありません。

Ⅵ　ああ、意中の夫人アザライス様のことは、なんと残念なことでしょう。
私は、あらゆる喜びを捨てることと、
今後は歌うことに別れを告げること以外はできません。
あの方のために、嘆いたり、泣いたり、たくさん心からのため息をついたせいで、
不安な苦悩のうちに置かれてしまっています。

Ⅶ　友であるアンドレウス殿、私の欲望は変化してしまいました。
今後、愛を享受することはないでしょう。

アイメリック・デ・ベレノイ（Aimeric de Belenoi）[26]
Ai las ! per que viu lonjamen ni dura（PC9, 1）

底本：ed. M. Domitrescu, *Poésies du troubadour Aimeric de Belenoi*, Paris: Société des ancien textes français, 1935, pp.114–117.
死者：ヌニョ・サンチェス（1242 年没）[27]
詩型：a10', b10, b10, a10', c10, c10, d10, d10（coblas unissonans, Frank 577: 132）

Ⅰ　ああ、どうして、長く生き続けるということがあるのでしょう、
毎日自分の悲しみが増していくのを見ている人が。
私の喜びはすべて涙に変わってしまいました、
私の心に留まるむごい悲しみのせいで。
思えば今、私のもつ悲しみを消してくれるほどに
大きな喜びはありません。
だから私は、言葉と音を調和させることができません。
嘆いている時、人はうまく歌うことができませんから。

Ⅱ　私は死に際して歌う白鳥と

同じ性質を持っているので歌わなくてはなりません。
私は歌います。苦しみ、悲しみ、
失ってしまった主君を悼んで。
ヌニョ・サンチェス、もしも自殺が許されるなら、
あの方を失った時、私は死ななければならなかったでしょう。
善良で愛するべき主君を失った者は
死ぬべきということになるでしょう。もう取り返しがつかないのですから。

Ⅲ　ヌニョ殿、私の悲しみがいかに大きくとも、
これほどに見当違いなことは申しますまい、
あなたが死んでしまったなどとは。絵空事を言うことになるでしょう。
死んでしまったというのは、神が心にとめない人へのものいいです。
神はあなたがそのもとに来るようにと命じました。
あなたが、神と「喜び」と「値のあること」に奉仕することができたからです。
あなたを愛していた人たちは死んでしまいました。
殿よ、あなたを失って、取り戻すことができないからです。

Ⅳ　あなたと一緒に死んでしまいました。「分別」も、「気前のよさ」も「節度」も。
だから、皆が悲しまなくてはなりません。
「価値のあること」に適ったあらゆるよき資質は
あなたと共に死んでしまうからです。そのため、「不実」が蘇ります、
この世で、愛されようとしない人たちの間で。
値のあることを望む人は、あなたの行いを手本にしますように。
そうすれば天国に行って、栄光を手にして、
自分自身とあらゆることに名誉を与えられるでしょうから。

Ⅴ　いまや、世界中が悪くなっていると言えます。
こんにち、悲しみに転じない喜びは存在しないからです。
ただ我らの主による豊かな喜びを除けば。
ですから、神に従うということの他の喜びに

気を向けたり、身を入れたりする者は馬鹿に見えます。
情けない世の中よ！　お前は、悲しみをもって
すべての所業を終わらせようとしている。人は決して
自分の幸福のためにお前の愛を信じるべきではない。

Ⅳ　ヌニョ殿、あなたについて、確かに言うことができます。
あなたが世の中を愛したのは、ただ神に仕えて、
その僕の品位を高め、名誉を与え、
悪人を打ち破り、挫くためだけでした。

Ⅶ　殿よ、あなたの魂をお守り下さるよう神に祈ります。
この世で、あなたは私に悲しむに十分なことを残したのですから。

ペイレ・ブレモン・リカス・ノヴァス（Peire Bremon Ricas Novas）[28]
Ab marrimen doloiros et ab plor（PC330, 1a）

底本：ed. P. di Luca, *Il trovatore Peire Bremon Ricas Novas*, Modena: Mucchi, 2008, pp.309–317.
死者：プロヴァンス伯レーモン・ベランジェ 4 世（1245 年没）
詩型：a10, b10', a10, b10', b10' a10, a10, b10'（coblas doblas[29]，Frank 295: 3）

Ⅰ　つらい悲しみや嘆きとともに
私はしぶしぶ生きていくでしょう。「死」が私を殺そうとしないから。
とても調子が悪くて、生きることが恐ろしいです。
私がそれよりも望んでいることといえば死だけです。
尊敬されていたプロヴァンス伯が、ああ、口にすることがつらい、
亡くなってしまったからです。ああ、なんという悲しみ、
ああ、なんという損失でしょう、とてもよい主君を
亡くしてしまいました。今後もの思いに沈まず暮らすことはありません。

Ⅱ　かつてあれほどに価値のある人がいたためしがありません。
その能力と分別と判断力のすべてを

自分の名誉になることをなすために注いだのですから。
それは神を念頭においてのことでした。神の召使いだったのです。
十字架にかけられて、苦しみ、悲しみながら、
私たちのために受難をすることを望んだ神が
その聖なる優しさにより、あの方の魂を
僕である天使とともにいさせてくれますように。

Ⅲ　かつて、弱い人も強い人も
あの方が神に対して持っていたよりも堅い信仰心を
持っていたことはありません。あの方は一度も過ちを犯さなかったし
信義にもとったこともないからです。むしろ、
あらゆる美徳が向上させてくれる忠誠心と
魂をよき港に導いてくれる赦しの心の均衡を保っていました。
他の美徳について言うことは重要ではありません。
あの方は何よりも神を敬っていたからです。

Ⅳ　ああ、プロヴァンスよ、なんという悲しみのうちに、
なんという不名誉のうちにとどまってしまったのでしょう。
お前は、楽しみも、遊びも、気晴らしも
喜びも、笑いも、名誉も快活さも失ってしまった。
フランスのあやつ[30]の手に落ちてしまったのです。
あなた方〔＝プロヴァンス人〕は皆死んでしまった方がよかった。
あなた方を救うことができたかもしれない人[31]は
あなたたちに忠誠心も信義も見いだしてはいません。

Ⅴ　伯は死んでしまいました。私は揺るがない期待を持っています。
あの方が、喜びや気晴らしとともに神のところにいますようにと。
プロヴァンス人たちは、死よりも酷い状況を
悲しみや不和とともに生きることでしょう。

Ⅵ　ああ、軍旗にとっても名誉にとっても、不幸なことです。
今後は、岩〔の砦〕も城郭も、あなたがたがフランスについている以上、
何の役にたつというのでしょう？　正しい、正しくないに関わらず、

あなたがたは、剣も槍も持とうとはしないのでしょうから。

逸名作者[32]
En chantanz [ieu] plaing e sospir（PC421, 5a）

底本：ed. G. Bertoni, in J. Anglade, «Les chansons du troubadour Rigaut de Barbezieux», *Revue des langues romanes* 60（1918–1920）, pp. 201–310（App. I, p.286）.
死者：プロヴァンス伯レーモン・ベランジェ 4 世（1245 年没）
詩型：a8, b8, b8, a8, c7', c7', d10', d10', e10, e10（coblas unissonans, Frank 592: 39）

Ⅰ　歌いながら私は、嘆き、ため息をついています、
プロヴァンスが被った痛手のことを。
この世で選びえる最良の三人のうちで
最良の方がなくなったのです。
ああ！　勲高いプロヴァンス伯のことを
どれだけ率直で、完璧で、高貴な生まれだったかと
思い出す時、
私の心は裂けて、そのために不幸を嘆かないようにと
堪え忍ぶことはできません。誰がこのことについて沈黙しているにしてもです。
あの方は、神を支えるための盾となったのですから。

Ⅱ　麗しき主君である神よ、
あの方は、あなたの支持者を
守るために、あなたに帰すものを
我がものにしようとした人たち[33] を敵にまわしたのです。
今や私にはわかっています、間違いありません。
プロヴァンス伯が亡くなった以上、
あなたは、あなたに帰すものを返せと求め〔るが無駄に終わ〕るだろうと。
私にはわかっています。もし、伯がもう少し生きていれば

〔異端の〕皆がすぐに心を改めたことだろうと。
主よ、あなたの助けがあの方に欠けなければ、ということですが。

Ⅲ　ですから、いったい、どうなることでしょうか、
騎士たち、夫人たち、町人たちは？
勲高い伯であり辺境伯である方が亡くなったのですから。
他の人たちはどうすれば癒されるのでしょうか？
あの方の支えのおかげで
プロヴァンスの万民は
そろって、平和で、害も加えられずにいたのですから。
本来なら悪党どもに対抗して
〔強者と弱者の〕中間の人たちと弱者を支えるべき
最良の人たちが無定見になっていることが見てとれるのですから。

Ⅳ　教皇よ、あなたを頼りにいたします。
あなたはあらゆるよきことの長（おさ）ですから。
私たちを罪から救うために、
十字架での死を受け入れた方に向けて
人々に祈らせ、あなたもお祈り頂くようにと。
神が、勲高いプロヴァンス伯に
赦しを与えて、つくべき座に据えますようにと。
神は、私たちにとっての父親がわりだったあの方を奪ったのですから。
教会に嫌われた暴君たちのことで、
あの方はなんとよくあなた〔＝教皇〕と意思を同じくしていたことか。

Ⅴ　栄光〔の処女（おとめ）マリア〕よ、どうか
あなたの慈悲により、私の願いを聞いてください。
あなたのご子息にどうぞお願いしてください。
ためらわず、御身のもとに
勲高い伯を受け入れてくださいますように、と。
また、プロヴァンスにいる私たちに
誠実で、率直で、平和を愛し、
心変わりせずに神と教会を愛する主君を与えてください、と。

そのような方であれば、敬われ、大事にされるでしょうし、
身内にも、他人にも畏れられるでしょうから。

Ⅵ　優れたプロヴァンス女伯よ、
よきことを愛し敬い、善をなすことを
よく心にとめてください。
そして、あなたの父上である伯のことを思い出して、
罪が本当とわかった時には
大きなことも小さなことも罰してください。

Ⅶ「始めよければそれで上出来」といいますが、
プロヴァンスにいる私はあえて言います。
よい始まりも、よい終わりがなければ、
あまり有益ではありえない、と。皆にあえて語りますが、
よい行いも、悪い終わりによっては失われてしまい、
よい終わりによってこそ、賞賛され、大切に思われるのだと。

ボニファツィ・カルヴォ（Bonifaci Calvo）[34]
S'ieu ai perdut, non s'en podon jauzir（PC101, 12）

底本：ed. F. Branciforti, *Le rime di Bonifaci Calvo*, Catania: Università di Catania, 1955, pp.129–131.
死者：意中の夫人（13 世紀後半没）
詩型：a10, b10', b10', a10, c10', c10', d10, d10, c10'（coblas unissonans, Frank 584: 1）

Ⅰ　私は〔愛する人を〕亡くしましたが、喜ぶことはできないでしょう、
私の敵たちも、私によいことが起こるのを望まない人も。
私の失ったものは、そのような人たちを当然悲しませるでしょうから、
深く、自死してしまうに違いないほどに。
そして皆が自死して当然でしょう。
私の愛する奥方が亡くなってしまったのです。あの方のおかげで
評判も価値のあることも、値打ちがあったのですから。この惨めな私が

そのように死を選ぶことができれば、それが生きているよりも
私を苦しめるかもしれなくても、ぐずぐずせず私は自死するでしょう。

Ⅱ　でも死んでも今より悪くなることはありえませんから、
私は悲しみながら生きていることにします。花も、葉も
どんな悲しみも私の嘆きから
何も減じてくれる力はありません。私は
いつも私を喜ばせてくれていたもののすべてを憎みます。
というのも、憤りが私を支配し、怒りが私を導いて、
私以外の何ものも生きていられない場所に据えるからです。
他の人であれば、皆死んでしまうようなことを味わいつつ生きていける
　ほどに、
私は、たくさんの不幸を忍ぶ術を知っています。

Ⅲ　美しい方が亡くなったせいで、
生きるのがあまりに辛いので、
涙を流さないとか、悲しみまないでいることはできません。
その死は、私のあらゆる心の支えを奪いましたが、私は望まないのです。
昼だって、夜だって、私を鬱屈させる苦しみから遠ざかるための
力や意思を持つことは。
あらゆる私の喜びと、幸せと、
私にできることで感じがよいことのすべては、あの方が源となっていた
　のですが、
死が彼女を私から奪い去ることを、神がよしとするのですから。

Ⅳ　あの方は、よい振る舞い、よい言葉遣いを巧みになす方でしたので、
神があの方を天国にお迎えくださいますようにとは祈りません。
なぜなら、神があの方をつまらないと思う、などという恐れを
持っているとか、そういう習慣だという理由で、ため息をついたり
嘆いたりすることはしないからです。というのも、私の思うところ、
あの方がいなければ、天国が魅力あるものによってよく満たされるとい
　うことは
ないでしょうから。なぜなら、私は全然怖れたり、疑ったりしませんか

ら、
神があの方を、神のいたまう場所で、その隣にいさせるということを。
それに、私はもう嘆きません。彼女との交流は遠いものになってしまったのですから。

Ⅴ　私には愚かに見えます、心と考えを
この世の喜びに置く人のことは。もっと愚かなのは、そういう喜びのために
いい気になっている人です。なぜなら、私は顔を涙で
濡らすことも、この世を儚(はかな)むこともありません、
あの喜びがあったという思い出以外の理由では。
私が、意中の夫人に見いだしていた
物腰と礼節のことです。もしも私が
そのためにこれだけの苦しみを味わうことになる、と知っておれば
喜びのことを高く見積もりはしなかったでしょうし、いま悲しむこともなかったでしょう。

Ⅵ　ああ、価値あることと礼節の華、
美の華よ！　ああ、美しく、優しい友だち！
「死」はあなたを奪った時、その欲望を満たしましたが、
私は、そのせいでとても悲しく、何も
私を陽気にしたり、力づけたりすることはできないでしょう。

ベルトラン・カルボネル（Bertran Carbonel）[35]
S' ieu anc nulh tems chantiei alegramen（PC82, 15）

底本：ed. M. J. Routledge, *Les Poésies de Bertran Carbonel*, Birmingham : A. I. E. O. University of Birmingham, 2000, pp.70–74.
死者：ペイレ・ギエム（トルバドゥール）（1260 年頃没）[36]
詩型：a10, b10, b10, a10, c10, c10, a10, d10'（coblas unissonans, Frank 553: 3）

Ⅰ　わたしはかつて軽快に歌っていましたが

いまは悲しんで歌います。そうする理由があるのです。
「死」が私から誠実な仲間を奪ったからです。
P.G. 殿のことです。そのせいで心が痛んでいるのです。
ああ、邪な「死」よ、お前は私をなんと惨めにさせたことか。
かつてどのような国でなされた行いを考慮しても、
もっとも雅やかで、もっとも礼節を知り、
もっとも良識がみられる人を奪ったのですから。

Ⅱ　ああ、今後は誰があれほど完璧に
立派な人にふさわしく、あらゆることをすることができるでしょうか？
あの人はいつも心を
人をもてなすことと、人に名誉を与えることに捧げていました。
愚かなひと、おしゃべりな人といる時は、
それにあわせていましたが、賢い人といる時は、立派でした。
今後私は、友人を探しても仕方がありません。
あの人と一緒に、誠実な心による愛は死んでしまったのですから。

Ⅲ　あの人の詩を読めば、とても優れたできなので、
私には十分に賞賛できないことがわかります。
難しい問題をよく理解できない人がいれば、
あの人は、礼儀正しく、
例をあげ、立派に筋道をつけて
教えてあげたものです。あらゆる問題を
解決し、判断を下したものでした。
それゆえ、ますます皆を喜ばせていたのです。

Ⅳ　ああ、万人に好かれるいい仲間よ！
そうです、かつてこれほど好かれた人はいないというほどに好かれていました。
私はどうしましょう。よいことも、ためになることも、
喜びも、私を楽しませるようなことも、
あなたの陽気な存在がなければ、私は決してもたないだろうから。
あなたは私のことを立てながら、私のためになることを追い求め、

たくさんの、美しく、喜ばしいことをいつも言ってくれたのでした。
あなたの言葉に比べれば、他のものは、粗野に思われるぐらいでした。

Ⅴ　全能の父であるイエス・キリストに祈ります。
よろしければ、あの人に本当の赦しを与えてください。
そして、議論の余地なく私がかつて見たうちで最良の人物にふさわしく
あの人を天空の一番上に列してください。
神の母親よ、というのも、神はあなたに大きな信頼を寄せているのです
　から。
あなたに祈ります。栄光に包まれたあなたの息子に祈ってください。
その受難があの人を救済に導きますようにと。
そして、足もとに居場所を与えてあげてください、と。

Ⅵ　二人のよい仲間の固い友情は、
ソロモンがこう言ったのだが、肉の愛よりも
固い。神に証人になってもらおう、
私は、自分の一族で、あれほどに愛したものは何もなかったことを。

ポンス・サントーリュ（Pons Santolh）[37]
Marritz cum homs mal sabens ab frachura（PC380, 1）

底本：ed. P. T. Ricketts, *Les poésies de Guillem de Montanhagol*, Toronoto: Pontifical institute of mediaeval studies, 1964, pp.140sq.
死者：ギエム・デ・モンタニャゴル（トルバドゥール）（1260 年頃没）[38]
詩型：a10', b10, a10', b10, b10, b10, b10, a10'（coblas unissonans, coblas capfinidas[39]，Frank 313: 2）

Ⅰ　欠乏と一緒に不幸を知る者として悲しむ
私は今後、悲しみと共に善を生きていきます。
我が身に注意[40]を払わない者としてうち捨てられて、
どのような気持ちも…ほどにはなく、
…悲しみにうちひしがれ、…
嘆きの涙…

モンタニョール殿…
…喜びは私を…ない…

Ⅱ　というのも、長続きしないこの世の喜びのことは信用できないので[41]、
私は、そんなことには思いを寄せないからです。
〔この世の喜びは〕、人が最も頼りした時に、
また、思い通りに成し遂げたと思った時に、欠けてしまうものだから。
ああ、惨めです。私はどうすれば意欲を持つことができるでしょうか。
もうどんな喜びも生きているうちは、私を励ますことがないのですから。
殿よ、あなたが死んでしまって以来、あなたに会ったことがあるあらゆる人が
あなたを悼んでいます。そのことにより神は純粋な名誉をあなたに授けているのです。

Ⅲ　純粋で、善良で、節度があって優しくて、
皆に好かれておいでで、（ほどんど自明なことですが、）
賢者として、抜け目がなく、完全に法に適って、
分別をもって学んだことをすべて行いつつ
俗世に生きておいてでした。学んだことを行い、
清らかに生きる見本を
私たちすべてに与えたのでした。あなたの完成された
気高く、堅牢で、揺るぎない学識もまた。

Ⅳ　トルバドゥールたちの揺るぎない首領かつ
正当な父親で、見事なまでに完璧でした。
頭が痛みを抱える時、四肢が萎えるというのは、
当然そうあるべきことであり、道理です。
つまり、頭が死ねば、四肢も一緒に死んでしまうことでしょう。
ですから、あなたと共に、あなたに追随する「大いなる知恵」は死にますし、
身体と魂の「救済」もなくしてしまうのです、
「完全な分別」も「知識」も「節度」とともに。

Ⅴ　あなたはこの世で、高貴な被造物として分別のあるふるまいを、
神に対しても、人々に対してもしておいででした。
あなたをお作りになった時に神は、心を尽くされたようです。
神も、同様にこの世の人々も
それぞれがあなたと一緒にいて、同じ望みを持っていました。
しかし、たくさんのことができる者がたくさんのものをとる、ということを神はしたのです。
ですが、当然です。何ものも、神と争って神のものを守れませんし、
そうしてはならないのです。神が〔あの方を〕手に入れたのは正当なことです。

Ⅵ　正しき裁き手、威厳のある神よ、純粋な慈悲よ、
権利を主張してではなく、屈従する者として慎ましく
あなたにお願いします。何よりもあなた次第なのですし、
あなたは寛大な心より慈悲そのものなのですから。
天国において、生命の冠という
聖なる装身具を堂々と
あの方の身につけてくださいますように、またよろしければ、
天上の衣装をあの方に授与なさいますようにと。

Ⅶ　神の母親、輝く女王よ、
あなたのおかげで救済の世界は輝いています
神があなたの胎内においでになる前は
この世での救済は暗闇に包まれていたのですから。

Ⅷ　慈悲にすがってあなた〔＝神〕にお願いします。このあなたの賞賛者を
あなたがお造りになったものとして見てくださいますように、と。

（この翻訳は平成 24–25 年度成城大学特別研究助成「トルバドゥールによる哀悼歌の翻訳と分析」の成果報告である）

注

1） E. Schulze-Busacker, «La complainte des morts dans la littérature occitane», in *Le sentiment de la mort au Moyen Âge, études présentées au Ve colloque de l'Institut d'études médiévales de l'Université de Montréal, sous la direction de C. Sutto*, Montréal: Aurore, 1979, pp. 229–248（pp. 232, 233, note 6）.

2） ed. M. de Riquer, *Los trovadores. Historia literaria y textos*, 3 vols., Barcelona: Planeta, 1975.

3） 様々な詩華撰に付された伝記によると、ドロームのサン・ドナ・アン・ヴィエンヌ出身の詩人。1209・10年頃から1228年頃までに書かれたと推測される9篇の詩が伝えられている。アルビジョワ十字軍に際しての反フランス的な心情は、このプラーニュにも見られるが、北イタリアに渡ったという履歴はそれを反映したものだろう。*Dictionnaire des lettres françaises. Le Moyen Âge*, Paris: Fayard（La Pochothèque）, 1992（以下、*DLF*[2] と略記）, p.596 を参照。

4） 詩の歌いだしの原文を、ピレットとカルシュテンの書誌（A. Pillet und H. Carstens, *Bibliographie der Troubadours*, Halle: Max Niemeyer, 1933）による分類番号を付して記している。

5） トゥールーズ伯レーモン6世の甥。アルビジョワ十字軍のはじまりにおいて、シモン・ド・モンフォールとイノケンティウス3世の教皇使節ミロンが率いる軍に捕らえられて獄死した。

6） 嘆きの対象となっている死者の没年が分かっている場合は没年を、不明の場合は推定成立年代を記すものとする。

7）「コブラス・ユニッソナンス」。すべての詩連において拍子・脚韻の構成のみならず、脚韻の音が同一である形式のこと。この作品でいえば、a: -atge, b: -or, c: -at, d: -es, e: -on という脚韻がトルナーダである第6、7詩節を除くすべての詩節で共通する。

8） 各連の韻律と、I. フランクによる詩型の分類番号（I. Frank, *Répertoire métrique de la poésie des troubadours*, 2 vols., Paris: Champion, 1953–1957）を示している。

9）「どこで停泊すればよいのか（ves on penrem port）」とは「どこに頼りを求めればよいのか」ということと解釈する。

10） この作品の校訂者の一人J. ミュラーは、同じ詩人の «Qan vei lo dos temps venir»（PC205, 4b）に出てくる友人アザライス・デ・ボイサーゾ（Azalais de Boissazo）であると推測している。J. Müller, «Die Gedichte des Guillem Augier Novella», *Zeitschrift für romanische Philologie* 23（1899）, pp.47–78（pp.48–51）を参照。この翻訳の底本であるM. リケールの注釈も、その説を採用している。

11）　写本に収められた伝記（vida）では、ガスコーニュ出身の吟遊詩人〔＝旅芸人〕であったとされている。彼の名前を冠せられた 11 篇の詩からは、カスティリア王アルフォンソ 8 世とアラゴン王ペデロ 2 世の宮廷で活躍したことが窺える。*DLF*[2], p.632sq. を参照。

12）「これほどに富んだ宮廷に生まれた」ということと解釈する。

13）　フェルナンドのこと。

14）「若王」と「リシャール殿」はイギリスの若ヘンリー王とリチャード 1 世、ジョフロワは、ブルターニュ公ジョフロワ 2 世のこと。彼らは、フェルナンドの母レオノールとともにヘンリー 2 世とアリエノール・ダキテーヌの間に生まれた。

15）『創世記』6, 4–6。神の子と人の娘たちの間に生まれたネフィリムのこと。大洪水によって消え去った。

16）　フェルナンドが死ぬことにより、生きている人々に打撃を与えたという罪を赦せと神に祈っているということであろう。

17）　1241 年から 1282 年までロデーズ司教の周囲で重職を歴任したという記録が古文書に残っている。ダウデには、18 篇の詩の他に鳥を使った狩りについての論考、四元徳についての論考がある。*DLF*[2], pp.370sq. を参照。

18）　作者同様、ロデーズにおける聖職者であったと推測されている。

19）　トルナーダとなっている二つの詩節の最初の二行のテクストには写本伝承上の問題が認められる。この詩は A 写本（すなわち、Rome, Biblioteca Apostolica Vaticana, latini 5232, folio 124r-v）と D 写本（すなわち、Modena, Biblioteca Nazionale Estense, Estero 45, folio 59r）の二つによって伝えられており、すべての校訂者は A 写本を採用しているが、A 写本の第 6, 7 詩節は c7'c7'd8d8 という形であり、最初の二行がそれまでの節によりも一音節多くなっている。D 写本では、第 6 節が c7'c6'd8d8、第 7 節が c6'c6'd8d8 である。校訂者のうちシュッツは D 写本をもとにテキストの修正をしたが、アペルとグレスティは、第 6 節の最初の行が共通の間違いを犯しているということは、これが古い写本に遡るということだということから修正を行わない。以下は D 写本が伝える後の時代の「修正」を取り入れたシュッツの校訂テクストの訳である。「まっすぐサラスに道をとりなさい／哀悼歌よ。なぜなら、ロデーズ〔の人たち〕が悼むべき人は／歌や詩（ヴェルス）や風刺詩を／そこに送ることを慣わしとしていたからです。」C. Appel, «Der Trobador Uc Brunec (oder Brunenc)», in *Abhandlungen Herrn prof. Dr. Adolf Tobler*, Halle a.S. : Niemeyer, 1895, pp. 45–78（p.62）; ed. A. H. Schutz, *Poésies de Daude de Pradas*, Toulouse-Paris: Privat-Didier, 1933, pp.83sqq. ; ed. Gresti, *op. cit.*, pp.123sq. を参照。

20）　C. アペルは、Salas という地名は昔も今もたくさんあるので、わからないとしながら、当時の文書に稀にといわず出てくるロデーズ県の Salles-

Comptaux のことではないかと推測している（C. Appel, op. cit., p.62 を参照）。A.H. シュッツは、これを打ち消して、ブリュネルがもっと正しく Salles-la-Source としている、と述べているが、Salles-Comptaux は大革命までのこの地の旧名である（ed. A. H. Schutz, *op. cit.*, p.XXIV）。

21） このセニャルが誰を指しているかは不明だが、底本の校訂者 P. グレスティは、第 4 詩節にでてくるイエス・キリストやマリアをさしている可能性もある、という説があることを指摘する（ed. Gresti, *op. cit.*, pp.128sq. を参照）。

22） オーベルニュのサン・ジュリアン・シャプトゥイユ出身。残されている 27 篇の詩の大半は恋愛を主題とする。*DLF*[2], pp.1200sq. を参照。

23） ポンスの伝記（vida）が伝えるところによれば、この詩人の意中の婦人「アザライス・デ・メルクール様は、オイジル・デ・メルクールの奥方であり、プロヴァンス辺境伯の臣下のうちで、尊敬を受けている騎士、ベルナール・ダンドューザの娘でした。」とある。J. Boutière et A. H. Schutz, *Biographies des troubadours: textes provençaux des XIII*[e] *et XIV*[e] *siècles*, Toulouse: Privat et Paris: Didier, 1950, p.258 より引用。

24） A. ジャンロワによると、アザライスの夫を指すという（A. Jeanroy, *Anthologie des troubadours. XII*[e]*-XIII*[e] *siècles*, Paris: La Renaissance du livre, 1927, p.44）。

25） «qui lauza pobles lauza dominus.» 写本によって «qui » は、«que»、«cui» の異読がある。諺であることは間違いないが、類例を見つけることはできなかった。

26） 伝記によると、ボルドー出身で学僧となったが、詩作に身を投じた。トゥールーズ、プロヴァンス、アラゴン、カタルーニャの宮廷に仕えた。22 篇の詩（うち 7 篇は、彼のものか疑わしい）が伝えられている。*DLF*[2], p.25 を参照。

27） ルシヨン伯（在位 1212–1242）。父親は、アラゴン王アルフォンソ 2 世（プロヴァンス伯アルフォンス 1 世）の弟で、一時プロヴァンス伯にもなったサンチョ（ルシヨン伯）。父とともに、アラゴン王ハイメ 1 世とプロヴァンス伯レーモン・ベランジェ 4 世の幼時の後見人を務めた。

28） プロヴァンス伯レーモン・ベランジェ 4 世の宮廷に 1230 年頃に吟遊詩人［＝旅芸人］として現れて活躍した後、伯の不興を買って、1237 年以降はマルセイユのバラル・デ・ボー、トゥールーズ伯レーモン 7 世の宮廷に出入りした。15 篇の恋愛歌、ソルデルとの間で交わされたシルヴェンテスなど、20 篇あまりの詩が残る。*DLF*[2], p.1112 を参照。

29） 「コブラス・ドブラス」。脚韻に同じ音がとられる二連一組の詩連が、I=II, III=IV, V=VI というように継続して現れる形式のこと。

30） ルイ九世の末弟で後にシチリア王となったシャルル・ダンジューを指す。

この哀悼歌の対象であるレーモン・ベランジェ四世の死の翌年（1246 年）、その娘のベアトリスと結婚してプロヴァンス伯を継承する。

31） トゥールーズ伯レーモン七世を指す。プロヴァンスを手に入れようと画策するシャルル・ダンジューの対抗勢力であった。ペイレ・ブレモンは、その援助にも関わらず、プロヴァンス人には状況を好転することはできないだろうという確信から、彼らを非難している。P. di Luca, *op. cit.*, p.316sq. を参照。

32） この作品を唯一伝える a[1] 写本（すなわち、Modena, Biblioteca Nazionale Estense, CAP. p.426sq.）では、作者としてリガウト・デ・バルベジュー（Rigaut de Barbezieux）の名を記している。これが正しければ、この詩人は 1210 年頃に死んだと推測されているので、プロヴァンス伯はアルフォンス 2 世（1209 年没）でなくてはならないということになる。しかし、この作品の第六詩節に「女伯」への言及があることは、むしろ、レーモン・ベランジェ 4 世（1245 年没）の死後、伯を娘ベアトリスが嗣いだという事実と一致する。M. Aurell, *La vie et l'épée*, Aubier, 1989, pp.142–145 を参照。なお、a[1] 写本は、これを所蔵するエステンセ図書館がデジタル画像を公開している。
http://bibliotecaestense.beniculturali.it/info/img/mss/i-mo-beu-gamma.n.8.4.11-13.html

33） 異端カタリ派の人々を指す。

34） ジェノヴァ出身で、諸国の宮廷を遍歴し、カスティリーア王アルフォンソ 10 世のもとには長く滞在した。1256 年頃から 1266 年頃までに 21 篇の詩を残した。*DLF*[2], p.211 を参照。

35） マルセイユの商人で、1252 年頃から 1265 年頃まで、この地の有力者デ・ボー一族のもとに出入りして詩作を行った。当時の世相をよく伝える 18 篇の詩の他、94 篇のコブラが残されている。後者は、歌会で課題となった詩の形式にあわせて一詩節を競作するというもので、これが多く残されていることは、この詩人の特色となっている。*DLF*[2], p.169 を参照。

36） この作品を唯一伝える写本（R 写本、すなわち Paris, Bibliothèque Nationale, fonds français 22543, folio 102v）には、死者の名がイニシャルでのみ記されているため、これが誰かについては複数の説が提示されてきた。ペイレ・カルデナル（Peire Cardenal）、ポンス・サントーリュ（Pons Santolh）、ペイレ・ギエム（Peire Guilhem）の名前が挙げられてきたが、トゥールーズ生まれのペイレ・ギエム説が有力である。ed. M. J. Routledge, *op. cit.*, p.73 を参照。なお、R 写本も BN Gallica で公開されている。
http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b60004306.r=22543.langFR

37） この詩の他には、コブラ 1 篇が伝わるのみ。C 写本（すなわち、Paris,

Bibliothèque Nationale, fonds français 856）第 361 葉裏に記されたこの作品の見出しには、「この作品は、G. モンタニャゴル殿についてトゥールーズのポンス・サントーリュが書いたプラーニュである。G. はその女きょうだいを妻としていた」とある。なお、C 写本は BN Gallica で公開されている。
http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8419246t.r=856.langFR

38） トゥールーズ出身で、アラゴン王ハイメ 1 世、カスティーリア王アルフォンソ 10 世の宮廷に出入りしたことや、異端に対する弾圧の厳しさに反発したことが作品に反映している。恋愛詩においては、愛を昇華ではなく聖化のための手段としたことに特徴がある。14 篇の詩が伝わる。*DLF*[2], p.600 を参照。

39）「コブラス・カプフィニダス」。各詩連の最終行に現れる言葉が、次の詩連の第一行で同一か、曲用・活用した形、派生語の形で現れる形式のこと。

40） この作品を唯一収める C 写本では、この作品の冒頭にあたる第 362 葉表に四角く切り取られた個所がある。以下の下線はこれを補うものであるが、J. クーレによる推測によっている。J. Coulet, *Le troubadour Guilhem Montanhagol*, Toulouse: Privat, 1898, pp.197–199 を参照。

41） この作品がコブラス・カプフィニダスの形式をとっていることから、前詩節の最後のある「喜び（gaug）」がここに入るという推測が成り立つ。